

第26回全国切り絵コンクール

入選作品展 目録 〔後期〕



第二十八回全国切り絵コンクール優秀賞

岩櫃城の砦 黒岩 功一 群馬県渋川市

平成29年9月27日（火）～11月23日（木、祝）

群馬県利根郡川場村谷地〔ふじやまの杜創作の里〕

主催 日本切り絵百景館

電話0278-52-2022

FAX 0278-52-2181

URL <http://kiriekan.ec-net.ne.jp>

開催時間：午前10時～午後4時 休館日：毎週火曜日（祝日を除く）

第26回全国切り絵コンクール入選作品展

後期

群馬県、埼玉県、新潟県、栃木県、在住の作者の作品

埼玉県

小山 静子	春・ら・ら・ら	桶川市
福島 あけみ	会津のわっぱめし屋	上尾市
東山 博	花 火	鶴ヶ島市
都所 壯	冬の日射(ひざ)しを受けて	毛呂山町
山田 積昭	晴れ姿(夢への一步)	さいたま市
田幡 美佐男	伊豆の春	川越市
新井 幸枝	匠の技	寄居町
野村 正一	鉄 橋	熊谷市
相澤 美智子	見て～又大きいのゲット	寄居町
生井 規友	賑わう里山の人気蕎麦処	さいたま市
都築 ひろみ	深緑の寺社めぐり	熊谷市
赤井 康輔	菊の戸窓い	さいたま市
山田 好美	夢の中のアロハ	桶川市
藤井 隆二	憩いのひと時	狭山市
山田 好美	ワァ高いそびえ建つ見晴台	桶川市
岩田 正男	倉敷・観光案内所前の遊覧	上尾市
久野 勝	ターミナル	深谷市
岡崎 恵子	秋のいろどり	熊谷市
山田 秋男	しだれ桜を見上げる	東松山市
伊藤 芳枝	あ！揚ったよ～	吉見町
奈良 イチ	遊 泳	深谷市
金子 幸子	冬近し	熊谷市
黒星 和枝	響き	朝霞市
星野 昇	真狩(まっかり)村から羊蹄山を望む	桶川市

新潟県

清水 泉	南禅寺水路閣	新潟市
遠藤 悦子	鎌倉「報国寺への道」	燕市
山田 トイ	霊峰八海山	燕市
広川 司	おいしくな～れ 新巻鮭	新潟市

群馬県

高岸 啓子	猿飛峡(黒部峡谷)	高崎市
広瀬 正巳	青春を吹く	高崎市
川田 富美子	八坂の塔 百日紅(さるすべり)の頃	伊勢崎市
山根 久征	ユーフォニウムはじめました	高崎市
天田 順子	ブナ林	伊勢崎市
田中 忠義	黒塚(くろべい)に囲まれた館	高崎市

栃木県

和田 功	百人一首「上の句」	足利市
〃	百人一首「下の句」	〃

第26回全国切り絵コンクール結果 入賞、佳作

賞	作者居住地	作者名	作品名	
大賞	神奈川県横浜市	岡田 尚美	ひたすらじーっと	
準賞	富山県小矢部市	金谷 真佐美	舟屋の午後—伊根の舟屋—	
優秀賞	神奈川県横浜市	佐藤 和子	初冬	
優秀賞	北海道函館市	三宅 亮子	おねえちゃん、まってー!	
優秀賞	埼玉県桶川市	小山 静子	清涼・風の道	
優秀賞	茨城県小美玉市	滑川 秀子	江戸村の散策	
優秀賞	北海道北斗市	吉田 慶助	福島大神宮の祭礼行列	
優秀賞	群馬県渋川市	黒岩 功一	岩櫃城の砦	
佳作	群馬県高崎市	茂木 愛子	千手ヶ浜のクリン草 日光	
佳作	茨城県小美玉市	滑川 秀子	和のテイスト	前期展示
佳作	神奈川県横浜市	谷 正幸	ゆるる揺れる!コワイ!	前期展示
佳作	埼玉県さいたま市	小山 国愛	漆黒にうかぶ	
佳作	埼玉県朝霞市	日熊 政庚	木曾路の休み処	
佳作	茨城県ひたちなか市	渡邊 妥夫	樹林の続く参道	前期展示

二輝会展〔平成29年度〕作品

戸田 幸子	神楽の顔	埼玉県小川町
中澤 紅葉	大湯(長野県野沢温泉)	群馬県藤岡市
林 君江	倉賀野宿散策	群馬県高崎市
松本 正一	木曾路の旅	群馬県高崎市
金井 勲	秋の陽の午後	新潟県高崎市
加藤 恵美子	旧栃木県庁	茨城県ひたちなか市
船木 逸子	緑の嶋から	北海道函館市
水島 勇	富嶽秋景	富山県高岡市
有馬 富士夫	ブルーウィングもじ	埼玉県北本市
山崎 育子	船溜まり(天竜川河口)	東京都瑞穂町
田中 孝子	会津の城をたずねて	東京都瑞穂町

一統 二輝会展一

鈴木 正雄	雨引観音仁王門(茨城)	茨城県日立市
中山 光子	日光 二荒山神社	群馬県伊勢崎市
江田 雅子	静 寂	岡山県津山市
川條 秀和	停 泊	兵庫県西宮市
河江 文比呂	赤い服の女	東京都大田区
加藤 三郎	石 塔	埼玉県朝霞市
森 愛子	森の中のゆり	東京都武蔵村山市
畑 徳江	ママ、おさかなさん	埼玉県上尾市
須貝 京子	荒砥(あらと)城	埼玉県上尾市
名取 政一郎	緑の溪谷	神奈川県横浜
櫻井 敏彦	心ながやが暮らす森	愛知県東海市
平 章弘	平林寺の鐘楼	東京都小平市
青藤 千鶴子	落ち葉をいそぐ木々	富山県富山市
後藤 伸行	ジョージ・イン(ロンドン)	群馬県川場村

冬の時代を迎えて！

7月27日の上毛新聞によれば、昭和50年から、群馬の切り絵界で活躍してきた【群馬切り絵の会】が7月末に解散することが報ぜられた。

また土屋文明が指導した短歌誌【ケノクニ】が今年の12月号で終刊し、71年の歴史に幕を閉じるとあった。(8月16日号)この二つの団体に共通していることは、高齢化が進み、会員の減少により運営が困難になったこと、高齢化にともない中心メンバーがいなくなり、会全体の運営が困難になったことが原因とあった。趣味の多様化や高齢化を背景とし、短歌誌野や俳句誌の終刊が相次いでいる言うどうやら日本の市民文化は、冬の時代を迎え、多くの団体は壊滅的打撃をうけているといえよう。

若い層が精緻を必要とする修行をさげ、簡単に結果を求める傾向は、これからますます増えてゆき、民族の衰退に流れてゆくのではないかと危惧の念をいだかざるを得ない。高い目標にむかってはげましあうこと、伝承すべき型をしっかりと抱いて次の時代に継承することが必要なのでありましょう。「仲良く生涯学習を続けてゆく」といつて我々のもとを去っていったグループがあつた。冬の時代にあつて才能を競い合う心、磨き上げた才能をたたえる心を失った集団は冬の時代に耐えることができるのであるか、61もあつたサークルが22になつた事例からその原因を学ぶことが必要なのではないかと思うのであります。冬の時代をむかえて個の強い意志の確立が求められていると申せましょう。

(後藤伸行)